ラテンアメリカ・カリブ研究 第 27 号: 42–48 頁 © 2020

〔文献紹介〕

100 年前のパンデミック—スペイン・インフルエンザの経験から

新木秀和 (Hidekazu Araki)
神奈川大学

2020 年現在、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が世界を震撼させている。連日、ニュースの洪水が押し寄せてくるが、その際にしばしば言及されるのは、1918 年から 19 年にかけて世界的に大流行したスペイン・インフルエンザの前例である。ここでは関連文献の紹介を交えて、ラテンアメリカ世界とインフルエンザ大流行の接点を探りたい。

1．スペイン・インフルエンザとは

20 世紀以降、インフルエンザ・ウイルスによる複数のパンデミック（世界的大流行）が発生した。そのうち最大の流行となったのは、1918 年から 19 年にかけて（日本のように 1920 年までを含める場合もある）2 度ないし 3 度の波をもたらしたスペイン・インフルエンザ（H1N1）である。当時は第一次世界大戦の最中であり、最初にカンザス州の米軍施設で流行し、船で欧州に派遣された兵士を介して世界各国へと広がった。中立国であったスペインから世界に情報が発信されたことで、同国の名がつけられ、「スペイン風邪」などと呼ばれていた。ラテンアメリカ・カリブ地域には米国からだけでなくヨーロッパからも船を介して持ち込まれた。

この大流行は世界人口（当時は約 15 億人）の 3 分の 1 近くが感染し、最大の推計で約 5000 万人の死者を出したとみられている。第 1 波は 1918 年の数か月で収束したものの、翌年にかけて、変異したウイルスがより強力になって戻ってきた。犠牲者に若者の比重が大きかった。2020 年の現状と比べるならば、5 月 21 日時点で全世界における新型コロナウイルスによる感染者数は 500 万人を超え、死者数は 32 万近くに達したが、1 世紀前の被害規模が感染者数も死者数もいかに大きかったかがわかる。

最近では、カミュの小説『ペスト』が話題となり、感染症を扱う各種の書籍に注目が集まっている。インフルエンザ関連では速水融による日本の事例研究が見直されている。それによれば、1918 年から 20 年までのインフルエンザ大流行は「風景を変えなかった」ために（つまり、1923 年の関東大震災や戦災とは異なり、目に見える甚大な被害をもたらさなかったために）、人びとの記憶から消えてしまい、研究も欠如していたという。そのような状況は、震源地とされる米国の場合について歴史家クロスビーが「忘れられたパンデミック」と名づけたこととも符合する。

スペイン・インフルエンザは流行の後半にかけてウイルスが強毒化したことで、多くの被害者をもたらしたと考えられる。疫病の侵入を港や国境で食い止めるために検疫措置や人の移動制限、公共施設の閉鎖や患者の隔離などが講じられたものの、拡大を抑えることは難しかった。医療従事者の感染が多くなると、場所によって医療の崩壊が引き起こされた。米国の例では、外出と集会の一律禁止により大流行を抑えたセントルイスと、それを行わなかったフィラデルフィアで、感染の度合いに明らかな差が出た（その対照的状況は、2020 年におけるカリフォルニアとニューヨークの差異を想起させる）。人の移動を止めるのが有効であり、政治的決断が不可欠だという教訓をもたらした。

ウイルスはラテンアメリカ諸国にも甚大な被害をもたらした。ジョン・バリーの叙述（バリー2005年：393ページ）によれば、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン三か国の状況は次のように深刻なものであった。

「メキシコでは、ウイルスは人口密度の高い中心部からジャングルまで浸透し、鉱山住宅居住者、スラム街居住者、スラム街家主、地方農民を多数苦しめた。チアパス州では全人口の10パーセント―インフルエンザ患者の10パーセントではない―が死亡した。」

「ブラジルでは―メキシコやチリに比べウイルスの力は比較的弱かった―リオデジャネイロでの感染率は33パーセントにのぼった。」

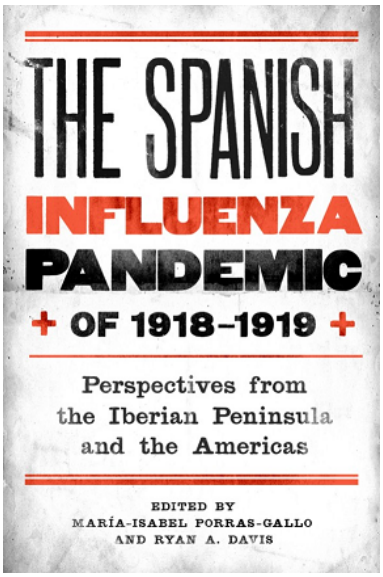
「アルゼンチンのブエノスアイレスでは、人口の約55パーセントがウイルスに感染した。」

2．スペイン・インフルエンザとラテンアメリカ―比較研究の紹介

そのように世界を席巻したスペイン・インフルエンザに関し、1冊の英語文献を紹介したい。イベリア半島と南北アメリカ大陸の事例を扱った比較研究である。

María-Isabel Porras-Gallo and Ryan A. Davis eds. *The Spanish Influenza Pandemic of 1918-1919: Perspectives from the Iberian Peninsula and the Americas* (NY: University of Rochester Press, 2014)

本書は3部（第1部：科学的言説―現在と当時、第2部：社会的反応―人的・制度的アクター、第3部：エピデミックを解釈する―社会文化的ダイナミックスと展望）から構成され、合計13の章を含む。分析の対象国はスペイン、



ポルトガル、カナダ、ブラジル、アルゼンチンで、従来の研究（少なくとも英語による研究）が注目してこなかった地域や国々を取り上げた比較研究となっている。イベリア半島に焦点が当てられるのは、ヨーロッパとアメリカ大陸の接点という位置づけによるが、編者のマリア-イサベル・ポラス-ガジョ（カスティジャ・ラマンチャ大学）とライアン・A・デーヴィス（イリノイ州立大学）がスペインの事例研究を主導してきた研究者であることにもよる。

次に、ブラジルとアルゼンチンに関する論考を取り上げ、具体的状況をみたい。ブラジルに関しては3つの論考が収録されている。ブラジルで最初に罹患したのは、ダカール（セネガル）に派遣された軍艦に乗り合わせた兵士と医師であった。1918年9月初めのことである。同じ時期には、リバプールからリオデジェネイロ港に到着した英国船デメララが、ブラジルにウイルスを持ち込み、瞬く間に国内に広まった（この船は9月25日にはブエノスアイレスに入港し、感染者が病院に運ばれた）。

(i) ブラジルの事例

リアネ・マリア・ベルトゥッチによる第2章「ブラジルにおけるスペイン風邪―エピデミックの恐怖下における原因の追究」では、まずブラジルにおける流行病について起源や経緯が述べられるとともに、専門家たちが未知の病をどのように理解したらよいかをめぐって様々な議論を戦わせたことが詳述される。専門家とは、サンパウロのブタンタン研究所とリオデジャネイロのオズバルド・クルズ研究所の研究者たちである。国内で流行をみせ始めた病が、果たしてヨーロッパで流行するスペイン風邪と同じものか否かといった問題が議論されていた。1892年にドイツの細菌学者リカード・ファイファー（1858-1945年）がインフルエンザ患者から分離した桿菌が病原体だとされており、ブラジルの医学者たちも、その説を支持するものと支持しない者の間で見解が分かれていた。実際には、病原体がウイルスであると確定されるのは15年後の1933年まで待たねばならず、当時はヨーロッパでもブラジルでも正体をめぐる論争が繰り広げられていたのである。

ブラジルにおける被害の規模をまとめると、リオデジャネイロの場合、感染者60万人のうち死者は1万2300人、サンパウロの場合は11万6777人の感染者のうち死者は5331人で、全国の死者総数は18万人にのぼったとみられている（p.49）。

他の2つの章はブラジルの地方に関する事例研究である。第6章「スペイン風邪の統治―ブラジル・ミナスジェライスにおける1918年インフルエンザ・パンデミックの影響とその反応」（アニー・ジャクリーン・トレス・シルベイラ著）は、19世紀末に成立した新興都市であるベロオリゾンテを対象に、公機関や市民のインフルエンザへの反応を追う。日常生活の変容ぶりは次のとおりだった。教育機関や商業・公共施設が閉鎖され、宗教・社会イベントが延期ないし中止となり、街路から人影が消えた。物資や医薬品（とくに、万病に効くとされたキニーネ）の価格が上昇した。公的支援の不十分さもあり、とくに貧困層に対しては、従来のように助け合いの精神を発揮する者たちもいた。

また「恐怖の感染」という表現がなされ、感染拡大に前後して恐怖感や不安感の伝播が顕著になったことが指摘される。その脅威を理解し、説明し、扱うために、人びとは多様な手段に訴えた。とくに重要だったのは宗教的解釈であり、カトリック教会によれば、パンデミックは罪深い人間への神による罰であり世界の終末の前触れとされ、救済の祈りと行列が執り行われた。さらに、第一次世界大戦と関連づけてドイツ陰謀説も流れたという。

病気の治療や治癒のための手段も多岐にわたった。ワクチン、浄化剤、滋養剤などや各種の薬草が患者や健康の者に与えられた。オニオン・ジュースが効くとの情報がフランスからもたらされた。その他、ナフタリン入りの小袋を首周りに巻くことや、パウダー、シロップ、石鹸などの様々なモノの効能がうたわれた。握手の習慣に反対する意見も出された。自殺や犯罪が増えているとの噂も流れていた。

そのようなベロオリゾンテの事例は、社会的格差やカトリックの影響力、科学的知識の黎明期における国家の公衆衛生的役割の脆弱さなどを露呈させている。

続いて、第7章「ブラジル・バイーアにおけるスペイン風邪―予防と緩和実践」（クリスチアヌ・マリア・クルズ・デ・ソウザ著）は、ノルデステ（北東部）におけるインフルエンザの影響と反応を対象にする。当初、良性つまり流感や風邪のようなものとみる医学者もいたことが示され

る。興味深いことに、世界各地で多様な呼び方がなされたことが記されている（本書ではほとんど英語表記だが）。米国人は「三日熱（three-day fever）」や「紫色の死（purple death）」、フランス人は「化膿性気管支炎（purulent bronchitis）」、イタリア人は「サシチョウバエ熱・三日熱（sandfly fever）」、ドイツ人は「フランダース熱（Flanders fever）」や「ビッツカタル（Bitzkatarrh）」、スペイン人は「踊り子（la dançarina）」「ナポリ兵（soldado de Nápoles）」、ポルトガル人は「肺炎（pneumónica）」と呼んでいたという。そして、他の諸国では「スペイン風邪（Spanish flu）」ないしインフルエンザとして知られていた。ブラジルでは「スペイン風邪（gripe espanhola）」と呼ばれただけでなく、上記のイタリアと同じ意味で、サシチョウバエの媒介による「パパタシ熱（pappataci fever）」ではないかとの見方も出された。この論考では「スペインの貴婦人（Spanish Lady）」という表現（dama espanhola）も取り上げられている。

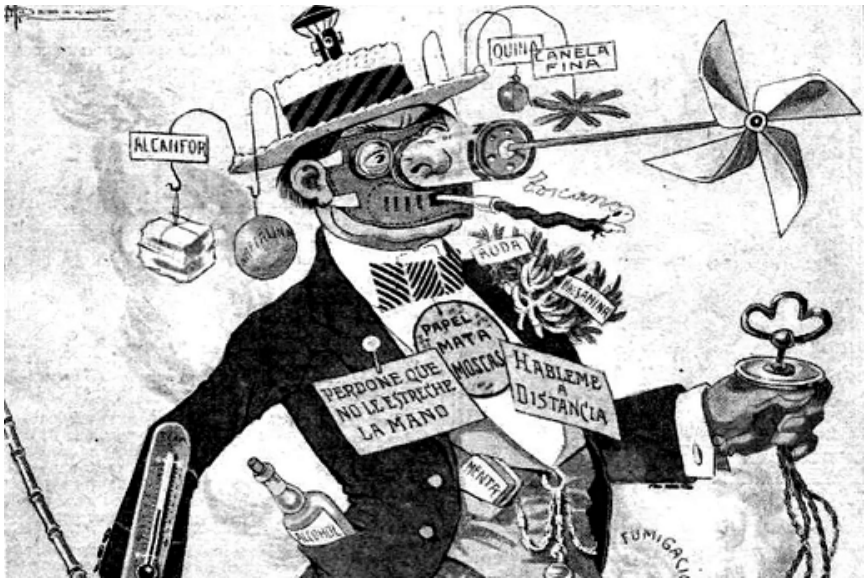
バイーア衛生総局（DGSPB）は、従来からペストや天然痘や黄熱などの深刻な感染症には関心を寄せてきたが、少なくとも初期にはスペイン風邪を軽くみて対処が遅れ、マスメディアから批判を浴びた。当局は、第一次大戦とともにコレラが侵入する危険の方をより警戒していたからだ。実際、バイーアでは1855―56年のコレラ流行でパニックが生じて大勢が逃げ出した挙句、約4万人が犠牲になっている。住民側もマラリアや結核などの被害には慣れており、前回1890-95年のインフルエンザ流行が急激ながら大した死者を生み出さなかったことを記憶していたため、「良性の風邪」だと見くびったのである。直撃を受けたのはサルヴァドールの市民生活だった。感染防止のため、軍事パレードや宗教フェスティバル、学校行事が中止され、寄港船への市民の訪問は禁止された。葬儀と埋葬の儀式が制限され、違反者は罰金の対象となった。

宗教の役割が高まったという指摘も興味深い。カトリック信者が大半のバイーア市民は、疫病の恐怖に直面して神に救いを求め、とくに、市内のノッソ・セニョール・ド・ボンフィム教会に祀られた像に奇蹟を祈った。1855年のコレラ流行時のように、ボンフィム像が祭壇から降ろされて、信者の祈りを受けた。しかし、西洋医学を身に着けた医者たちは、カトリックではない民間信仰（カンドンブレなどのアフリカ系文化を含む）や伝統医療を禁止した。そのような状況でも、諸文化が融合した伝統の中で、人びとは民間療法に訴えた。チコリティーなどのハーブティーを飲み、患者の身体をブランケットでくるみ足を温めて汗をかかせるなど多彩だった。人びとはそのような家庭療法に頼ったので、病床を埋めたのは貧困層か入港船の乗組員だけとなった。その他、民間療法や医師による処方を中心に様々な実践が行われたという。当時のバイーア州知事によれば、32万人の州人口のうち13万人が罹患したが、死者は386人に抑えられたと推定されている。

なお、本書には書かれていないが、第5代ブラジル連邦共和国大統領（任期1902-06年）を務めたロドリゲス・アルヴェス（Rodrigues Alves、1848-1919年）は、1918年11月に大統領に再選されたものの、10月からインフルエンザに罹患して就任できず、翌19年1月に犠牲者のひとりとなった。

(ii) アルゼンチンの事例

アルゼンチンの例は、エルナン・フェルドマンによる第10章「アルゼンチンにおけるスペイン風邪―警戒すべき人質」で取り上げられる。その焦点は、当時のマスメディア（新聞や雑誌）



Manuel Redondo, “Prophylaxis contra el gripe”, *Caras y Caretas*, 2 de noviembre de 1918

における報道の分析である。主要な新聞や雑誌は、イリゴジェン政府による警戒発令への慎重な姿勢や対策の不備を痛烈に批判した。情報提供の不足も非難の的になった。これに対して政府は、市内各所（街路、映画館、劇場、教会、路面電車など）の消毒、船舶やゴミ捨て場や長屋住宅の検査、教育施設や夜間遊興施設の閉鎖、隔離病院の設置、死者の日行事の延期などの諸政策を実施したが、効果は十分とはいえなかった。

人びとの社会文化的な反応についても色々と紹介されている。なかでも、雑誌『カラス・イ・カレタス (*Caras y Caretas*)』の 1918 年 11 月 2 日号が掲載した風刺画は傑作である。インフルエンザに対する完璧な感染防止の装備を身体中にほどこした仰々しい姿の人物（ブエノスアイレスの街路を闊歩する紳士のようだ）が描かれている。顔面には毒ガス防止マスク、頭部の帽子からはキニーネ、シナモン、カンフル（クスの樹）の名札が出て、ポケットにアルコール瓶とミント、ハエ採り紙が貼られた胸部には「話しかけるときは離れてください」「握手できないので失礼」というメッセージを読むことができる。

ここで紹介した 4 つの論考は、テーマや視点は異なるが、いずれも「スペイン風邪」という当時の一般的な呼称をあえて使いながら、新聞（地方紙を含む）や雑誌（医学専門誌を含む）、公的文書や個人の記録などをふんだんに活用した歴史研究となっている。本書にとどまらず、ラテンアメリカ・カリブの各地域や各国を対象にするスペイン・インフルエンザ関連の歴史研究は、2018 年の百周年を機に数を増してきた。スペイン語やポルトガル語による情報や論考は、インターネットで検索すれば、かなり多く入手できる。しかし、日本語ではまとまった研究が見当たらないのが現状である。

本書からは他の国々の状況も詳しく紹介されている。スペインやポルトガルにおけるインフ

ルエンザの流行について読んでいくと、2020年における新型コロナウイルスの爆発的流行をみているような既視感がしてくる。

3．その後のインフルエンザ流行

インフルエンザをめぐる後日譚を少し記しておきたい、スペイン・インフルエンザの記憶が忘却の彼方に追いやられた21世紀、特定の国への注目が集まったのは2009年のメキシコにおけるインフルエンザの例であろう。新型インフルエンザの発生が懸念されていたところ、同年4月23日にメキシコ政府がベラクルス州やメキシコ市での病人発生を公表したのが始まりとされる。保険省は翌24日、メキシコ市の学校や図書館、博物館を閉鎖するなどの対策に出た。同時期、ニューヨークや、カリフォルニア州などの米墨国境地帯でも感染例が報告され始め、北米におけるアウトブレイク（地域的な感染拡大）の状況が伝えられた。

そして、米国やカナダの保健当局によって新型インフルエンザであることが確認される頃には、大陸を越えた拡大がみられ、渡航制限措置が取られたにもかかわらず、次第にヨーロッパやアジアへと拡大していった。当初は豚インフルエンザと呼ばれたが、WHOは呼称をインフルエンザAに変更し、6月にはフェーズ6への引き上げ（パンデミック）を宣言した。その後、2010年には流行が収まったが、WHOによれば、同年8月29日までの死者は世界で2185人となり、最大の死者数はブラジルの577人、次に米国の522人であった。

インフルエンザの感染拡大は、人口の密集や、国境を越えた地球規模での人の移動が大きな要因になったといわれる。実際、海外旅行客数は、SARS（重症急性呼吸器症候群）が流行した2003年には世界全体で約7億人だったのに対し、2018年には14億人へと倍増している。人の移動の活発化が感染症の伝播を容易にしたことは明らかであろう。

4．コロナ襲来―非日常の日常化

時間の針を現代に戻そう。中国武漢から始まった火種は、2月になるとダイアモンド・プリンセスに飛び火した。そのような一連の出来事を対岸の火事と傍観していた世界の論調は、しかし、ヨーロッパをはじめ、世界の大陸が次第にコロナ色に染められていくと、急にざわついてきた。WHOは3月11日という象徴的な日にパンデミックを宣言している。エボラ出血熱でもジカ熱でもそうだったかもしれないが、たとえ南の世界で感染症が猛威をふるっても、国際協力に冷淡だったといわれる北の国々。その先進諸国、つまりヨーロッパ各国や米国が急速に深刻な状況になると、世界は混迷の度を深めていった。

そして、新型コロナウイルスはラテンアメリカにもあっという間に広がった。「ちょっとした風邪（uma gripe qualquer）」に過ぎないというボルソナロ大統領のもと、ブラジルでは感染者数が急増してヨーロッパ諸国を抜き、世界第2位に達した。ブラジルに次いでメキシコ、ペルー、チリ、エクアドルなどでも感染者が増えており、状況の悪化に歯止めがかからなくなった。同地域の感染拡大の状況やその政治経済的影響については、日本語でも情報や論考が出始めている。中国や北の先進諸国での状況が一段落してくると、今度は南の国々で感染が拡大する傾向が目立っている。南北アメリカ大陸が新たな震源地になったと指摘される。

2020年の前半、世界中で「感染」という言葉が巷にあふれ、社会的距離やリモート／オンライン対応による新しい生活様式が急ピッチで

推進されてきた。日本社会ではカタカナ用語も氾濫した。パンデミックにとどまらず、「クラスター」（cluster、感染者の集団。ラテンアメリカ研究の分野では産業集積を指して産業クラスターと表現するなどの使い方がなされてきた）、「オーバーシュート」（overshoot、感染者の爆発的増加。元来は為替相場の大きな変動を指す用語）、「ロックダウン」（lockdown、都市封鎖）などである。緊急事態の宣言と解除に社会がゆれ、こうして「非日常の日常化」が進む。それは時に劇的に時にじわりじわりと表面化していく。

肉眼でみえないウイルスの世界的流行は、インターネットが普及し情報過多の現代における初めてのパンデミックである。ヒトやモノの移動が加速しデジタル化が進んだ現代において、逆説的ながら問題の根源が、人と人の物理的・社会的な距離というアナログ面にあることが明らかになり、人間社会のあり方が問われている。コロナ禍は、感染症そのものの恐怖に加え、先行きのみえない不安を充満させている。それだけに、歴史の経験をふまえて現状を相対化しながら、展望を切り拓いていくことが求められよう。

参考文献

クロスビー、アルフレッド　W．2009『史上最悪のインフルエンザ―忘れられたパンデミック』（西村秀一訳・解説）（新装版）みすず書房

桑原幹夫 2020「ラテンアメリカへ拡散する新型コロナウイルスのインパクトとその対応策（上）（下）」（ラテンアメリカ・カリブ研究所レポート）ラテンアメリカ協会

速水融 2006『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ―人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店

バリー、ジョン 2005『グレート・インフルエンザ』（平澤正夫訳）共同通信社